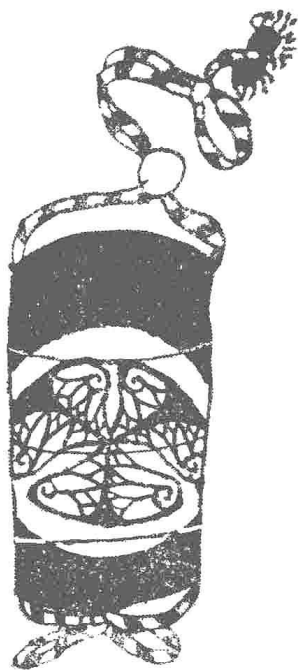


柴田鍊三郎

天下の勝負

—— 徳川太平記 ——



文藝春秋新

天下の勝負 — 徳川太平記 —

定価 四五〇円

昭和四〇年二月二五日第一刷発行

著者 柴田 錬三郎 ©

発行者 上 林 吾 郎

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
電話(代)五七一—三二四—番
振替口座 東京七八七四三番

印刷所 凸版印刷
製本所 矢嶋製本

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします

目

次

貞女誘拐

七

競馬無情

四

將軍街道

三

同行二人

六

商人嘉吉

五

浪人使者

四

遺言試合

四

道場異變

五

寒山拾得

三

大岡忠相

七

禁裏使者

七

鉄鎖囚人

八

小猿失敗

九

不屈囚人

九

武士町人

一〇五

大伝法院

一二三

孤身無住

二九

飛泉天女

一六

懺悔抱擁

一三三

忍び盜賊

一四〇

落人活路

一四七

將軍吉宗

一四四

江島生島

一六

名君癈足

一六

落胤苦惱

一七五

金剛試合

一八三

城代思案

一八

因果父子

一八

落胤失踪

二〇三

無言草庵

二一〇

呪詛山頂

二一七

偽裝行列

二二四

有為夢幻

二三一

奉行冷酷

二三八

老中執念

二四五

有夫側妾

二五二

敗北前夜

二五九

奉行術策

二六六

落胤最期

二七三

父子対面

二八〇

將軍孤独

二八七

天下の勝負

— 徳川 太平記 —

装
幀
村
上
豊

貞女誘拐ゆうかい

一

「天一坊——」

遠くで、わが名を呼ぶ法印ほういんの声をきき乍ら、十五歳の小阿闍利あじかりは、部屋をにげまわる鼠いっぴきを、鋭い目で送っていた。

杉戸をたてきった十畳の、調度ひとつないガラシとした部屋に、鼠は、すがたをかくす場所がなく、ただ、いたずらに、にげまわるだけであった。

小阿闍利の右手には、手裏剣しゅりけんがつかまれていた。

「天一坊——。天一坊は、居らぬのか？」

法印の声が、近づいて来るにつれて、小阿闍利の顔には、——うるさい！

との表情がうかんだ。

鼠をこの部屋へ、追い込んでから、もう四半刻近くになる。

ただの一投で、仕止めてくれよう、と思っていたっているのに、まだ小阿闍利は、手裏剣を、鼠めがけて、撃うつてはいなかった。

鼠は、敏感に、静止すれば、手裏剣を放たれるものときとっている模様で、必死になって、杉戸を駆けのぼり、天井を奔り、壁をつたい降りて、畳際をぐるぐるまわっているのがあった。

蹠音あしおとが、近づいた。

「天一坊！ どこだ？」

しかし、小阿闍利は、むっと口を真一文字にひきむすんで、奔る鼠を視線にとらえてはなさぬ。

いきなり、杉戸が開かれた。

瞬間——鼠は矢の迅はやさで、天井の一隅から、そこへ跳はんだ。

同時に、小阿闍利の右手から、手裏剣が放たれた。

「ああっ！」

白装束の山伏は、鼠と手裏剣が、おのれへ向って、飛び込んで来たので、仰天した。

足もとへ、手裏剣をつらぬかれた鼠が、落ちるのを視みて、

山伏は、目を瞑った。

それから、小阿闍利へ、視線をあてた。しかし、山伏は、その迅業をほめるより、まず、驚愕で起った動悸をしずめなければならなかった。

「失礼いたしました」

小阿闍利は、法印をおどろかせたことを、べつになんとも思わぬ落着きはらった態度で、ちょっと、頭を下げた。

法印は、その態度を、小面憎いと、思った様子で、

「権大僧都が、お呼びじゃ」

と、云いすて、さっさと、立去った。

この小阿闍利は、この醍醐の真言宗本山である山伏寺で、すぐ目上の法印や律師から、あまり可愛がられていなかった。

端正な面貌に冷たい気品がありすぎたし、举措振舞いにも少年らしからぬ落着きがありすぎたのである。

また、ひとつの理由として、小阿闍利にされていたが、山伏に補任するために、当寺に預けられたのではなかった。

一同は、権大僧都から、

「天一は、修験道を踏ませる者ではない。戒行を励ませるに、並の小阿闍利の扱いをせぬように——」

と、申し渡されていたのである。

誰が、どこで、きき出したともなく、天一坊が、高貴の人の落胤であるらしい、と一山に知れわたってから、いよいよ、法印や律師たちは、厄介者視をしたのであった。

天一坊は、鼠から手裏剣を抜いて、懷中にすると、廊下を歩いて行つた。切下げ髪に白衣白袴の装が、よく似合っている。

権大僧都は、茶亭にいた。

すでに、古稀を越えた老人で、数十年間野に寐、山に伏した難行苦行のおかげで、人間はなれをした風采になっていた。江南の橘、江北に生ずれば枳となる、というわけで、人間も修行次第では、こういう姿になるか、と常人をおどろかせる。

この老人が、野や山に佇立していれば、人は近くをすれちがっても、立枯れの樹木と思いちがえて、気づかずに、行き過ぎるに相違ない。

大僧都は、天一坊が坐っても、一瞥もくれずに、サラサラと茶筌の音をたてて、点前を愉しんでいた。

黒茶碗を、掌にのせて、しずかに喫む老いた修験道を、天一坊は、無心な眼眸で、眺めていた。

大僧都は、黒茶碗を、置いてから、はじめて、天一坊へ、視線をまわした。

「そちは、上加茂の競い馬に、名乗りをあげたそうじゃな？」

「はい」

明日——五月五日は、端午の節供であつた。往古の風がいまに伝わり、家々の軒には、菖蒲、蓬が葺かれ、京大坂では粽餅がつくられ、江戸では柏餅がつくられ、いずれも菖蒲酒を祝う。

俗に三月三日を女の節供、五月五日を男の節供といい、男子のある家、特に当歳の男児のあるところでは、鍾馗、武者絵の幟を立て、宵人形、菖蒲刀を飾る。紙鯉を幟とともに、空にひるがえすようになったのは、ずっと後世になつてからのならわしで、江戸ではじめられたのである。

この日、上加茂では、今年元服した十五歳の少年をえらんで、競い馬を催す。

この騎手にえらばれるのは、栄誉で、後年までの自慢の種になるので、名乗り出る少年は、数百の多きをかぞえたところが、えらばれるのは、わずか二名であつた。

二

「いかなる存念で、競い馬に名乗りをあげたな、天一？」

大僧都は、訊ねた。

「それがし、十五歳に相成りましたゆえ」

天一坊は、こたえた。

「当山には、元服の儀法はない。そちは、山伏にはならぬ掛人ではあるが、寺住いをいたして居る限りは、小阿闍利の身分じゃ。……武家の子息と、馬を競おうといいたすのは、如何なものであらうかな？」

「許さぬ、と仰せなれば、今日をもって、おいとまつかまつります」

天一坊は、きっぱりとこたえた。

大僧都は、じつと、少年を見据えて、

「許さぬ、とは云わぬぞ」

「有難う存じます。……それがしが、二人のうちにえられたのでございますね？」

「うむ。籤が当たった」

「もう一人は、何人でございますようか」

「京都所司代の与力筆頭の子息じゃ。その父が、去年逝き、姉と二人ぐらしの、文武ともに頭抜けて居る天晴れな旗本若衆という評判じゃ」

「……………」

「それと、競うて、そちが、勝てるかの？」

「わかりませぬ」

ただの競い馬ではなかった。どちらが早く、駆けるかというだけでなく、馬をとばしつゝ、対手を、得物で撃ち落すことがみとめられていたのである。

いわば、戦場に於ける、馬上の戦いを演じてみせるのであった。

得物は、剣、槍、薙刀、弓矢、手裏剣なんでもおのが好みによって、使うことができた。但し、二つの得物を用いることは許されなかった。

「天一！」

老いた修験道は、容儀をあらためて厳然と云った。

「競い馬に、出るからには、勝たねばならぬ！」

「はい」

「敗れて、ぶざまに地べたにころがり、すぐすぐと戻って参ることは、断じて、許さぬ。当山の小阿闍利である以上、そのような恥辱を衆目にさらしては、生きて居れぬぞ」

「はい」

「その覚悟ならば、馬を競え」

「かしこまりました。……大徳に、おうかがいしたいことがございます」

「なんじゃ？」

「勝利を獲るためには、その手段をえらばずとも、かまいませんぬか？」

「……………」

「それがしが、当山で教えられるところによれば、修験といっぱ、その修行満ちたる後の本字とあれば、難行苦行を為し、修行おわりて後の本名、とか。かかるがゆえに、十界輪宗の嘲言に徹すれば、厭うべき肉食なく、両部不二の法水を嘗むれば、嫌うべき淫慾なし、として立てる法が、これであると知ります。されば、競い馬においても、これに勝つに、意外の手段を用い——たとえ、それが悪鬼の所業に似て居ろうとも、これもまた修行のひとつかと存じます。が、如何？」

十五歳の小阿闍利に、堂々と、云いたてられて、大僧都は、ちよつと返答にとまどつた。

「その手段とは？」

大僧都は、問うてみた。

「それは、申上げられませぬ」

大僧都は、沈黙を置いてから、

「後日の悔いとせず、おのが身を滅ぼす因とならぬのであれば、勝つべき手段を講じるのは、やむを得まい」

と、こたえた。

天一坊は、頭を下げて、茶亭を出て行った。

——はたして、なんの手段を用いるというのか？

老いた修験道は、自負の程をその後姿にも示した小阿闍利を見送って、不安をおぼえた。

行いて送ぐる能わざるは恥、と教えたのはおのれである。手段をえらばずともよいか、と、問われて、頷かざるを得なかった。

しかし、許可を与えたあとには、名状し難い重い気分が来た。

修行を積み了えた古稀の大僧都ともあろう者が、十五歳の小阿闍利に、みごとに、してやられたかたちであった。

三

その夜——初更。

加茂神社境内で、一人の娘が、はだしの百度詣でをはじめていた。

百本の櫛を手にして、社殿と二ノ鳥居の間の石甃をヒタヒタと蹠音たてて往復し、その櫛を一本ずつ供える願掛けである。

これをおわって、手水舎で、水垢離をとることになる。

娘は、京都所司代の与力筆頭蒔屋清左衛門の女春菜であった。二十四歳。当時としては、婚期を疾くに逸している。永わすらいの母を八年前にうしななって以来、父が後添えをもらわぬ家の主婦となつて、弟参之助の世話をしているうちに、いつの間にか、二十代なかばになつてしまつていた。

弟の元服を待つて自分もどこか後妻にでも嫁ぎたい、という望みも、昨秋、父の急逝に遭つてから絶えた。

この上は、弟が与力となつて、出世の道を歩むのを、見まもるばかりである。弟は、その期待に応えてくれるに相違ない。所司代までが目をかけてくれている俊才なのである。

明日の競い馬が、まず世間に名を挙げる第一歩であるとするれば、姉の為すことは、加茂神社の百度詣でであった。

ヒタヒタと石甃を踏んで、往復し乍ら、春菜は一心に、口のうちに、呪文をとなえる。

「……かしこみ、うやまいて、申し上げ奉ります。上は、梵天帝釈、四天王、下は、閻魔法王、五道冥官……天の神、地の神、家のなかには井の神、竈の神、伊勢の国には天照大神……雨の宮、風の宮、月読み、日読みの御神……日本六十余州、すべて神の政所、出雲の国の大社、九万八千七

社の御神のうち、当社のおん神に、願ひ上げたてまつる、なにとぞ、蒔屋参之助に、お加護を垂れたまいて……」

しだいに、百本の榊が、数すくなくなつた。

やがて、最後の一本が、その手にのこつた。

二ノ鳥居をまわつた春菜は、最後の歩みを、社殿に進めた。

その時である。

狛犬の蔭から、すつと、一個の人影が現れた。

春菜は、呪文をとなえつつ、行きすぎようとして、さつと、前をふさがれた。

「蒔屋参之助殿の姉上でござるな？」

「……………」

百度詣でのさなかに、人と口をきいてはならぬ掟があつたので、春菜は、黙つて、対手をよけて、進もうとした。

とたんに、対手は、とびかかつて来た。

神燈の明りに、対手が、男ではあるが、弟と同年配の少年であるのをみとめていたので、春菜は、怖れも警戒もしていなかった。その隙をねらわれて、こぶしの当て身をくらつた春菜は、最後の一本の榊を、社殿へ供えるようにさし出して、その場へ崩れ落ちた。

意識がよみがえつた瞬間、春菜がまず気がついたのは、下着いちまいにされていることであつた。

肌にしひび入つて来る夜気は、五月というに、うすら冷たかつた。

春菜は、次いで、両手が、左右にひきのばされて、何かにしりとりつけられていることを知つた。

しんの暗闇であつた。

春菜は、もがこうとして、両手が、箒笥の環にしばられているのだと判つた。

何故に、このようなひどい目に遭わなければならぬのか、見当もつかないままに、春菜は、憤りと口惜しさとはずかしさで、涙が滲んで来た。

と――。

愛音がして、障子が、ぼおつと、灯かげで、浮きあがつた。

春菜は、憎悪をこめて、入つて来る者へ、睨子を据えた。燭台を持って、入つて来たのは、加茂神社の境内で、自分を当て落した若者であつた。

ゆらめく焰をさかさに受けた貌は、妖しいばかり美しかつた。

春菜は、下着の裾が乱れて、脛があらわになっているの

を、対手の目からかくそうと、身をよじった。

若者は、歩み寄って、

「明日まで、そのままに、辛抱して頂く」

と、云った。

双眸そうまうの光も、声音こゑもつめたかった。

「なにゆえの、狼藉ろうぜきです？ このようにはずかしめを受けるおぼえはありませんぞ！」

春菜は、叫んだ。

「そちらになくとも、こちらには、ある」

「ききましよう！ なぜじゃ？」

「明日になれば、判る」

「何者じゃ！」

「そなたの弟と、明日、馬を競う者——」

「えっ？」

「天一坊と申す、醍醐の山伏寺の小阿闍利だ」

「狼藉のわけをききましようぞ、わけを！」

春菜は叫んだ。

天一坊は、無表情で、

「いかに叫んだところで、ここは、人里はなれた竹藪の奥の一軒家ゆえ、むだでござる」

と、云った。

「わけをきこうと申しているのじゃ。弟と競い馬をする者が、なにゆえに、その姉を、かどわかして、このようなはずかしめを与えるのじゃ？」

「……………」

春菜は、憤りにまかせて、天一坊の顔へ、唾を吐きかけた。

瞬間——天一坊の無表情が、さっと険しいものになった。「……ひっ！」

春菜は、悲鳴を發した。下着と下裳したもの裾を、捲まきられたのである。

「鳥は啼いたばかりに撃たれることになるのだぞ」

天一坊は、冷然としてあびせた。

深更にいたって、何処の何者とも知れぬ使いの者が、蒔屋家へ、一通の封書を投げ入れて行つた。

それには、

「姉上のおん身、頂戴仕り候」

それだけ記されてあつた。

蒔屋參之助は、その夜まんじりともできぬことになった。

競馬無情

一

本津の巽三十町ばかりに、瓶原がある。この瓶原から、加茂渡口に至る磧を、清見川原、という。

坤の方は南都般若坂に出る。川上は、笠置・飛鳥路へ行く。笠置は、これより四十町ばかりはなれている。南は奈良路である。

この日——五月五日早朝。

清見川原には、夜が明けやらぬうちから、人々が蟬集して来た。

加茂神社の競い馬は、ここで催されるのであった。

陽がさしそめた頃あい——。

磧に程近い松の疎林の中にある、なんの祠ともさだかではない古びた小さな社に、天一坊の姿があらわれた。

ここらあたりは、天平の時代、離宮があったとつたえられ、それらしい跡が林の中にも見られた。

天一坊が歩み寄った杜前の井戸も、あるいは、その時代に掘られた井泉かも知れなかった。

天一坊は、白袴を脱ぎ、白衣をすてて、裸形を、朝陽に曝すと、釣瓶を把った。

眉目になんの表情もなかった。

宛然、毎朝のしきたりであるかのように、汲みあげるや、ひくく、

「南無——」

と、唱えて、頭から、無造作に、かぶった。

七度、くりかえしてから、からだを拭こうとして、天一坊は、視線を、祠の方へ向けた。人の気配が、そこに在ったのである。

朽ちかかった階の上に、その男は、立っていた。

いかにも尾羽打ち枯らしたという風体の浪人者であった。祠の中で寝ていたのを、水垢離の音で、目を覚させられたに相違ない。

天一坊は、浪人者の視線が、おのれの裸身に、鋭く刺さるのをおぼえた。

「なんだ？」